

教育長様

校番 33 府 中 高等学校長

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校  
令和元年度 報告書**

## 1 研究の概要

研究の目標（※計画書に記載したものを再掲）

本校で育成すべき資質・能力を各教科や総合的な探究（学習）の時間等でルーブリックによる評価を行い、生徒に自己の学びを省察・改善させることで、生徒の資質・能力の伸長を図る。

研究内容（※対象，時期，方法を含む）

○総合的な探究（学習）の時間等における「探究的な学習」の充実について

## (1) 相互評価の効果の分析

生徒の発表の場面等において、評価ルーブリックを自己評価や相互評価、教員による他者評価において活用し、生徒が学びを省察できるようにしている。相互評価の際に適切な評価をさせるため、評価の根拠としてコメントを付けることや、無記名での評価などを行った。

## (2) 仮説・検証型の探究学習

1年生から仮説・検証のサイクルを数回経験できるようにした。「自らの学びに関する課題」においては、理想と現状の差から自らの学びに関する探究課題を設定し、仮説の検証を行った。「持続可能な社会の構築に関する課題」においては、現代社会の課題を題材に情報収集や表現方法の工夫を学びながら探究活動を行った。

2年生の「府中学」は、「府中をより良い町にするには」というテーマのもと、グループで現状分析、課題設定を行いながら探究活動を進め、2月下旬にポスターセッション形式で府中市への提案を行った。

3年生の「課題研究」においては、現代社会の課題を自ら発見し、仮説を立て、検証を行った。探究活動の成果を全員発表し、クラス代表者による探究活動のコンテストを行った。

全学年において、教員による指導の他、個人やグループで課題を見直す機会を複数回設け、課題設定を繰り返し行った。また、毎回の授業の内容を振り返る場面を設定し、1枚ポートフォリオにまとめている。

## (3) 各教科の学びを生かす場面設定

「読解力」「論理的思考力」「表現力」を「カリキュラム・マップ」の形として1枚にし、各教科のつながりが見える化した。「カリキュラム・マップ」では単元名のみを明記し、各教科・各科目において、単元ごとに「単元シラバス」を作成した。「単元シラバス」には、「カリキュラム・マップ」と整合性をもたせながら特に育成したい資質・能力を明記している。

○資質・能力の評価について

## (1) ルーブリックの活用

各教科の「単元シラバス」に生徒自身が自己評価を行うための評価規準としてルーブリックを載せている。このルーブリックは、学校全体で育成する資質・能力のルーブリックをもとにして、各教科の特性に合わせて作成している。また、教員による他者評価については、全教科において授業の中で行うパフォーマンス課題や定期考査での活用問題の場面で評価している。

総合的な学習（探究）の時間については、授業の中で行う発表やグループ協議の場面で評価をしている。発表の場面では主に生徒同士の相互評価、グループ協議では主に教員による他者評価を行っている。評価結果は新たな視点で考えるきっかけ作りなどに活用している。また、振り返りの場面では自己評価も行い、次の探究活動や日々の学習の改善に繋げている。

8月上旬には、教科横断型活用問題を用いた校内研修会を行い、学校全体で資質・能力やルーブリックの共有を図った。1月には、教科横断型活用問題を実施した。学校全体で育成する資質・能力のルーブリックを基にした評価ルーブリックで評価し、生徒の成長度合いを測った。

## 今年度の成果と課題

### 成果

- ・「カリキュラム・マップ」や「単元シラバス」の作成により、各教科・科目の学びのつながりや単元ごとの目標等が明確になり、どの場面でどのように資質・能力を育成していくか具体化することができた。
- ・「総合的な探究（学習）の時間」だけでなく、各教科においても育成すべき資質・能力についてルーブリック評価を行うことができた。
- ・「総合的な探究（学習）の時間」において、相互評価や自己評価を用いながら仮説・検証型の探究学習が深まるよう授業内容の改善をすることができた。

### 課題

- ・「カリキュラム・マップ」等の今年度までに整えた仕組みを活用しながら、探究的な学びが深まるような授業改善が十分にできていない。
- ・ルーブリックによる評価等がその後の指導に十分生かされていない。
- ・資質・能力を見取る場面として今年度は1月に教科横断型活用問題を実施したが、分析結果を指導に生かしていくためには時期を早める必要がある。

## 次年度の目標及び取組内容

### (1) 教科の学びを生かす場面設定

「カリキュラム・マップ」等を活用し、単元ごとの学びを深めながら、生徒の資質・能力を伸ばしていく。そのために、「総合的な探究（学習）の時間」において、各教科・各科目で学んだことを生かし、探究活動が深まるように授業改善をしていく。例えば、1年生の「自己理解」においては、自らの学び方を振り返りながら、自分の担当科目について仲間にアドバイスができるように指導し、各教科・科目の学び方も深まるようなプログラムを取り入れる。2年生の「府中学」においては、クラスを越えて探究課題ごとのグループ編成を行う。より多くの人の考え方を共有でき、多面的に考えられる場面作りをする。

各教科・科目においては、単元シラバス等を基に授業を実施し、単元ごとに内容の定着度を測っていく。生徒の「読解力」「表現力」を伸長させるため、読解力養成プログラムを実施する。

### (2) 資質・能力の評価について

全ての教科・科目において単元シラバスを基に資質・能力を身に付けるための授業等を行う。資質・能力を見取る場面として、来年度は10月頃に教科横断型活用問題を実施する。各教科においては、単元ごとに内容の定着度を測り、評価後はフォローアップの時間を設ける。

学校全体で育成する資質・能力のルーブリックをもとにした評価ルーブリックを用いて、計画的に生徒の成長度合いを測り、データを蓄積していく。また、継続的な学びとなるよう、学期ごとに自己の学びの状況を自己評価させる。評価の状況は生徒自身だけでなく教員も確認をしながら、その後の面談や学習計画に生かしていく。